



『魔法先生ネギま!もうひとつの世界』
『Extra』魔法少女ユエ

原作 赤松健

〔登場キャラクター〕

綾瀬夕映(ユエ・ファランドール)

コレット・ファランドール

エミリィ・セブンシープ

ベアトリクス・モンロー

総長(グランドマスター)

J・フォン・カツツエ

S・デュ・シャ

歴史の教師

女教師

インタビュアー

実況アナウンス

看護師精霊A

看護師精霊B

生徒A

生徒B

エミリィママ

医者

ネギ・スプリングフィールド

○アリアドナー・魔法学園・教室

魔法世界の歴史の変遷を読み聞かせる教師。それを静かに聞き入る生徒達。

歴史の教師「…以上のように、南の古き民と北の新しき民は古くから様々な確執をもっていた訳ではありませんが、20年前の『大分裂(ベルム・スキスマティクム)戦争』時点においても全面戦争に至るほどの理由はどこにもなかったためです」

× × ×

戦況が描かれた世界地図が(黒板に)展開。

歴史の教師オフ「全面戦争が両陣営にとって何ら益をもたらさない事は旧世界(ムンドゥスウエトゥス)のごく百年の愚を見るまでもありません。この戦争には、世界を欺き両者を裏から操って私腹を肥やそうとした悪党達の姿があったのです」

× × ×

ユエ「…」

耳を傾ける生徒達の中にユエの姿が。

歴史の教師オフ「両陣営の中枢にまで潜り込んでいた彼らは、不安と混乱を煽り、怒りと憎しみを醸成させ、戦火を拡大させようとしてきました。この『彼ら』こそ、かの悪名高き秘密結社『完全なる世界(ノスモエンテレケイア)』です」

× × ×

王都オスティアの全景。

歴史の教師オフ「この組織と歴史あるウェスベルタリア王国の王都オスティアの犠牲をもって大戦は終わりを告げます。最悪の事態は避けられたのです。そして大戦末期、その全ての真相を暴き世界を滅亡の危機から救った英雄とまで言われるのが、皆さんもよくご存知のナギ・スプリングフィールドと『赤き翼(アラルブラ)』なのです」

× × ×

黒板に映し出される「赤き翼」のメンバー(ナギ、詠春、ラカン)。その写真を見て思わず立ち上がるユエ。

ユエ「…」

ユエ「目を向けるヒミリイ。」

歴史の教師「どうかしたのかな? ユエ・ファランドール君」

ユエ「い、うえ…」

その隣には何事か分からないという顔の「レット」。

「…」

ユエ「ナギ・スプリングフィールド…どうして彼の名前が気になるのでしょうか…?」

○アリアドナー市街全景・ユエの回想(日没直前)

○魔法学園・保健室・ユエの回想

魔法学園の保健室で女教師の検査魔法を受けているユエ。学園の制服を着ているが上半身はキャミソール一枚。

ユエの周りを浮遊・周回する看護師姿のかわいらしい看護師精霊A・B。

看護師精霊A「異常なしデス」

女教師「大丈夫なようね。身体も頭の中身も問題ないわ。やはり頭部を強く打ったショックによる

一時的な健忘ね」

ユエ「ぶつもです先生」

と言いつつ上着を羽織るユエ。

コレット「じゃあ先生、ユエの記憶も戻ってくるんですね？」

女教師「ただし…」

コレット「(キョトンとして)え…」

女教師「記憶消去の魔法をかけられた可能性は否定できないわ」

コレット「うっ…」

女教師の言葉を受けて動揺するコレット。ユエは重い表情を浮かべる。

女教師「でも安心してユエ。このアリアドネーは学ぼうとする意志と意欲を持つ者なら、例え死神でも受け入れる、どんな権力にも屈しない世界最大の独立学術都市国家よ。記憶が戻るまではかまわないわ」

ユエ「あ…ありがとうございます…」

2人のやり取りをよそに作り笑いを浮かべるコレット。その脳裏にユエとの出会いがフラッシュバックする。

等に乗ってブツブツ言いながら本を読んでいるところに、突如光の柱が出現。そこから突如ユエが現れ、回避しきれず衝突。その拍子に箒・魔法の杖・本が飛び散り、魔法の杖が暴発する。

コレットM「言えない…。2日前、課題に夢中でよそ見してた私が突然道に現れたユエに激突…さらに課題の初級忘却呪文が充填された杖が暴発…。つまり、ユエの記憶喪失の原因は…そう、全ては私のせいっ！」

ユエ「あの…学びたい者は誰でも受け入れると言ったですよ。私の記憶が戻るまで…私も…」
コレット「コレットさんと同じ、魔法騎士団候補生の授業を受けられないでしょうか？」
女教師「ふむ…魔法騎士団ねえ…いいわOKよ！ 向学心旺盛な子はいつでも大歓迎！ 掛け合

つておいてあげるわっ」

○魔法学園・教室・ユエの回想

真剣「授業を受けるユエとコレット」。

ユエN「いつて私は、騎士団候補生として魔法学園で勉強することになったのです」

歴史の教師「つい一世紀前まで、民衆の間では伝説か御伽噺と思われていた、この『旧世界(ムン

ドウス・ウェトウス)』ですが、ある面では我々より遙かに進んだ社会形態を持ちながらも、

他面ではより深刻な病理を抱えた世界ともいえ…」

× × ×
他にも展開する授業風景。実験の授業で壺から煙が出て驚愕する2人、黒板に出て問題を解くユエ、等の絵が続いていく。

○魔法学園・校庭・ユエの回想

ユエN「ただ、どうも私はあまり出来の良い魔法使いではなかったようで…」
校庭で飛行訓練中の2人。なかなか飛べないユエに（帯に乗って）上空から声援を送る「レットの絵。」

ユエN「もつと力を…」

図書館で座学に励む2人の絵。

ユエN「もつと知識を…」

芝生の上で足が浮いた絵に代わり

ユエN「そして、出来得るならば…」

ついに飛行に成功し歓喜の表情のユエと、両手を挙げて喜ぶ「レット。」

ユエN『あの人のような、立派な魔法使いになるです!!』

と、自分の心の声「?」となるユエ。

ユエN「あの人…? あの人は誰です…?」

ひらけた空を見上げ顔の分からない『あの人』に思いを巡らすユエ。

○魔法学園・教室

ユエの回想から戻って授業風景。教師の説明が続いている。

歴史の教師「さて、大戦末期の巨大な魔法災害によって居住が困難となり廃都とも呼ばれるようになったオステシアですが、環境は復活してきています。来月には戦後20年を機に、大祭典が開かれる予定です。」

ユエM「ナギ・スプリングフィールド…廃都オステシア…」

○サブタイトル

○魔法学園・図書館(夕方)

放課後、窓から日が刺す図書館の机で調べ物をするユエ。

ユエM「ナギ・スプリングフィールド。既に故人だったですか…。彼の写真を見たときのあの感じ…。」

もしかと思ったのですが…」

ユエHの肩をなめてナギの10歳の頃の写真のロロ。

ユエM「これが10歳の頃…?」

なぜかドキっとし頬が赤くなるユエ。その背後から突然「レット」が現れ

「レット」な——「見てるのユエ——」

ユエH「はっあ」

突然声をかけられ目を丸くして驚くユエ。

「レット」えーっ!? なーんだナギの「ト調べてたの!」

「エ」えい、これは別!」

「レット」それなら早く言ってくればいいのに!!」

そう言いやって腕組みし傲慢げな顔で

「レット」実は私も大ファン!!」

「エ」えっ!」

「レット」クラブカードを取り出し、

「レット」ナギファンクラブ会員ナンバー九万六千七十七番」

「エ」そ、それはスゴイのですか?」

「レット」そりゃスゴイよー5ヶ台台なんかなかなかないよー」

「EM」こんな有名な知人のハズはないですね」

「レット」の勢いは止まらず、今度はシートを取り出し、

「レット」そっそう、ナギが好きなら「レ」にも興味あると思うなー」

そこには「ロシウム」での大人ネギの勝利者インタビューが立体映像で映し出され、

「エ」「何です「レ」は。録画……?」

「レット」グラフィクスって街の拳闘士なんだけどね」

インタビューアー」どうもー☆ナギさん絶対調デスねー。やはりオスティアへの出場は視野に入れてお

うでっ!」

大人ネギ」……もちろんです」

シートを見つめる「エ」と「レット」。「エは、大人ネギの顔を見て「ハッ!」とし、

「エ」この青年は……?」

「レット」今話題のナギのそっくりさん」

二人の背後から突如「エミリー」が現れ

「エミリー」フン、相変わらず情報が遅いですわね、「レットさん!」

「エ」「アッ!」

「レット」な、なんだよ委員長ッ!」

「エミリー」あなた方のような人達がナギ様のファンを語るとは笑止! これを見なさい」

そこで言う「エミリー」もファンクラブカードを自慢げに取り出し、

「レット」なっ……そ、それは!?」

「エミリー」ぶ……」

「レット」かかかか、会員番号七十八イーツ!? 二桁台なんてそんなバニャニャ」

「エミリー」私こそが真のナギ様のファン! 親の代からのファンです」

「エミリー」シートに映し出された大人ネギをアブナイ目でウットリと見ながら

「エミリー」ナギ様がいなくなってしまうって久しい今……その方は迷える私達のため、天が遣わした生

まれ変わりに違いありません」

「レット」アッ!」

「エミリー」あなた達のような落ちこぼれ!」にはもったいないですわ!」

「レット」ぬぐぐぐぐ。ファンに落ちこぼれとか関係ないでっ!」

ユエ「……………」

2人のやり取りにキョトンとするユエ。

○「レットの部屋・外観(夜)」
ユエ「あの拳闘士は本物のナギではないのですか」

○「レットの部屋の中(夜)」

「レットはベッドに、ユエは椅子に腰掛け談笑中。

「レット」まあ、流石にホンモノってことはないと思うよ。ファンの間でもナギを騙った詐欺師だから断固否定派、似てるからいいじゃん派、隠し子派、クローン派と、様々な派閥が…」

ユエ「結局よくわからないですね」

ユエ、大人ネギの立体映像に見入って

ユエM「ナギ・スプリングフィールド…。確実にこの人物には私にとって重大な何かがあるのです。

彼から受ける強烈な印象…動悸息切れ、頬の紅潮…。ハッ…まさかこれはいわゆる「目惚れ……………」

頭をブンブン振って否定するユエ。

ユエM「いえいえいえいえいえ…と、とにかくこの人に会えば私の記憶が…いえ私の全てがわかる気がするのです!」

ユエ「……………」

拳を握り締め高らかに宣言するユエ。

ユエ「オステシアへ行くですよ!!」

「レット」ええ……………!? あっ…まさかユエ、記憶の……………」

ユエ「ハイ。是非行って調べてみたいのです」

「レット」なるほど…でも、私達寮生が遠い外国のお祭りに行くなんて無理だよ」

ユエ「確かに、お祭りに行くなどという理由で外出許可は出ないですね……………」

現実を悟って意気消沈する二人。

○魔法学園廊下(朝)

ユエの手を引いて廊下を急ぐ「レット」。

「レット」「アツアツアツアツ。ホラ、ユエはやへへ…」

ユエ「なな、何です?」

向かった先の掲示板には紙が張られていて、生徒達でこつたがえしている。

ユエ「ん…これは…」

張り紙を見て驚くユエ。

ユエ「オステシア記念式典における栄えある警備任務を諸君の中から募集する。各学年から2名。

志願者多数の場合は今週末、選抜試験を行う…。これはまさに渡りに船!」

「レット」志願してみよーよユエ! 選ばれたらヘアで行けるよー」

と意気込む2人の背後からエミリーの声。

「エミリアオフ」ぶぶん、そんなに簡単にいくのでしょうか」

振り向くとそこにはエミリアとベアトリクススの姿が。

「レット」委員長は

「エミリア」あなた達のような落ちこぼれ」」が」のような名譽ある任務に選ばれるとお思いです

か。甘いすねー」

「レット」(苦笑しい表情で)うげ…。や、やっぱり委員長も志願…?」

「エミリア」当然です」

エミリアの台詞を受け、ショックを受けるエドとレットで。

× × ×

廊下を戻る「エド」レット。

「レット」も……委員長めつ。新入りでダメダメだったエドがメキメキ力をつけてきたから目の敵

「うてるんだよ」

「エド」そ…そうなのですか?」

そのままでの怒りは去り、一気に士気が下がる「レット」。

「レット」でも委員長、あれで実力はスゴイからな。勝てないよー」

「エド」落ち着くです」レット。特訓ですよ、これまでどおり。選抜試験の内容は?」

「レット」うん、種目は審判フリーだよ。魔法による妨害自由!!」

「エド」妨害自由…」

「レット」うん。でも、直接攻撃魔法は厳禁だから『武装解除(エクサルマティオー)』の撃ち合いに

なるねー! まあ正直…凄惨な『脱がし合い』になるね! 女子高なのをいい事に…」

「エド」脱がし合い?」

「レット」怖じ氣じいた?」

「エド」(顔に汗をかきつつ)いい、いえ」

「ぶしを重ねあう二人。

「レット」じゃあ」

「エド」ええ。委員長を「ノンパン」にして」

「レット」エドの記憶を取り戻そう!!」

「エド&レット」おっー」

共に決意の表情で。

○魔法学園・試験スタート地点

記念式典選抜試験当日。スタート地点に集まる志願者たち。側では大勢の生徒たちが声援を送っている。

実況アナウンス「それでは! 栄えあるオステティア記念式典警備隊選抜試験を始めます。ではま

ず志願者の紹介をー!」

自信満々のエミリアと落ち着き払った表情のベアトリクススが現れる。

実況アナウンス「3-C委員長エミリア・セブンスと書記ベアトリクス・モンロー」

「委員長がんばってー」という声援が生徒から上がる。

実況アナウンス「3-F、J・フォン・カツエとS・デュ・シャ」

続いてカツエとデュ・シャも登場。

実況アナウンス「3-G、マリー・ド・ノワール、ルイズ・ド・ブラン。3-J、メアリー・クロイス、

アンナ・ヴァンアイク」

ユエたちを除くペアが登場。彼女らを横目に余裕の表情を浮かべるエミリー。

エミリー「フフ、この面子なら楽勝ですね」

そう言いながらエミリーは勝手な妄想を膨らませます。

× × ×

どこからともなく現れた大人ネギとぶつかるエミリー。

大人ネギ「あ、すみません」

爽やかな表情の大人ネギは、エミリーの手をとって甘い言葉を口にする。

大人ネギ「お詫びに食事を…いえ、結婚してください!!」

思わぬ言葉に歓喜して即答するエミリー。

エミリー「喜んで!!」

× × ×

エミリー「ぷ」

そこで鳴り響く出場者の紹介アナウンス。

実況アナウンス「そして最後に3-Cユエと」レットのチーム」

悦に入ったエミリーの表情が一気に覚める。そしてボロボロの姿で現れたユエと」レット。

共に息が荒い。周りの生徒達からはヤジが飛び交う。

生徒A「テタッ！ 落ちこぼれ」レット」

生徒B「ホントにやるのー?」

その雰囲気にもまれ緊張をあらわにする」レットに、自信でみなぎった表情でユエが優しく

言葉をかける。

ユエ「大丈夫ですよ」レット」

」レット「そそそ、そっだよね。あんなに特訓したんだもんね」

ユエM「いままでの記憶はありませんが…。これほどの情熱で何かに打ち込んでいるのは、初めて

だという気がするです」

× × ×

実況アナウンス「では各選手、位置について」

箒に乗って位置につく志願者達。

ユエM「これに勝つてあの人に会えます!!」

実況アナウンス「スタート!!」

一斉に飛び立つ選手達。

○魔法学園・校内(スクリーン前)

校内のスクリーンの前で生徒達がレースを観戦している。画面には市街を滑走する選手達が映されている。

○アリアドネー市街

街を滑空する志願者たち。

実況アナウンス「ご存知のとおりレース中は妨害自由。10か所のチェックポイントを通過した後、ヘアでスタート地点まで帰ってゴールです！現在のところ1位はエミリア&ヘアトリクス組。2位フォン・カツエ&デュ・シャ組。そして、なんと3位には…」

ユエとコレットの姿がUPになり、

実況アナウンス「落ちこぼれコレット、ユエコンビ!!」

エミリア、カツエ共に後方に目を向け、

エミリアM「ユエさん…」

カツエM「やるじゃない力落ちこぼれ」

眼前にカツエ組を捉えたユエたち。

ユエ「くです」コレット!!」

コレット「合点、ユエ!! アネット・ティ・ネット・ガーネット!!」

ユエ「フォア・ソ・クラティカ・ソクラティカ!!」

呪文を詠唱しカツエ組に杖を向けるユエたち。対するカツエ組も臨戦態勢に。

カツエ「バクナム・ティナッツ・ヨナッツ」

デュ・シャ「ハイティ・マイティ・ウェンディ!!」

魔法をぶつけ合い、激しい閃光を散らす。

ユエ「風花・武装解除(フランス・エクサルマティオー)!!」

カツエ&デュ・シャ「熱波 武装解除(カレファキエンス・エクサルマティオー)!!」

ユエの魔法がカツエ組の障壁を破り衣服をビリビリにする。

カツエ&デュ・シャ「キャ!!」

「おおっ」とどよめく観衆男性達。ユエ組は、カツエ組を置き去り先を急ぐ。

コレット「(嬉しそうに)やた」

ユエ「徹つたですー」

前方のエミリアも驚きの表情で

エミリア「何ですって!!」

勢いによって速攻をかけるユエたち。

ユエ・コレット「加速(アクケレット)!!」

実況アナウンス「おおーっ!? 落ちこぼれコンビー! スタート早々仕掛けた!」

エミリアの背後からユエたちの影が迫る。

エミリア「焦りの表情で(くっ…)。ハッ」

エミリアは急ブレーキで停止し反転。

ヘアトリクス「お嬢様!!」

エミリア「素人が調子に乗って…。いいでしょう転校生!! 受けて立ちます!!」

そつ言つて呪文を詠唱するエミリア。

エミリア「タロット・キャロット・シャルロット!!」

その様子に素早く対応するユエたち。

「ユエ」狙いどおりです！「コレット、私と二重障壁展開！！フランAです！！」
「コレット」了解」

エミリイ、迫り来る2人に呪文を放つ。

エミリイ「氷結・武装解除（フリーゲランス・エクサルマティオー）！！」

エミリイの魔法はユエたちの障壁に弾かれ、周りに煙が立ち込める。

エミリイ「弾いた!? くっ煙が…?」

「コレットM」さすが委員長、ただの武装解除（エクサルマティオー）が凄い威力…！」

煙の中では機をつかがっていたコレットが呪文を詠唱しながらエミリイに迫る。

「コレット」アネット・ティ・ネット・ガーネット」

魔法を放つ直前で煙から抜け出し、エミリイの前に現われる「コレット」。

「コレット」風花（フランス）…」

エミリイ「ふ…」

慌てることなく余裕の表情で指をならすエミリイ。と同時に魔法発動。

エミリイM「氷結・武装解除（フリーゲランス・エクサルマティオー）！！」

「コレット」ひゃああ…」

服が破け前を隠す「コレット」。

「コレットM」うそお、無詠唱呪文!?!」

エミリイ「小賢しい真似を！ 浅はかですわね、そんな単純な策にこの私が…ん？ ユエさんは…」

その言葉を待たず背後から強襲するユエ。

ユエ「風花・武装解除（フランス・エクサルマティオー）！！」

右手を突き出して障壁を張ろうとするも間に合わず、上着がはだけ上半身が下着だけの

姿になるエミリイ。

エミリイ「顔を赤らめて）な…なな…」

ユエ「慢心したですわ委員長」

そこへ間髪いれずベアトリクスが援護に入る。魔法の矢が2人に降りかかる。

「ユエ」…」

ベアトリクス「お嬢様！」

ローブを持ったコレットにユエが指示。

「ユエ」コレット引くです」

エミリイ「ぬぐぐぐ…」

○ アリアドネー市外・草原地帯

ユエとコレットが草原を独走中。

実況アナウンス「都市外壁を出た時点で先頭はコレット・ユエコンビ!!これは予想外!!コースはいつもどおり市街を抜けた後、魔獣の森を大きく回り再び市街に戻ります」

○ 魔法学園・総長室

広々とした室内。総長が窓際にある机に座っている。机の上に展開している小さいウィンドウ

で試験の様子を見ている。

総長「…今年もワチの生徒は元気ねえ…あら」

ロ元のOPで

総長「フフ…この子は特に元気ね」

○ アリアドネー市外・草原地帯

レースを続行するエミリイ組。

エミリイ「ぐぐぐ…。。ユエ…ファランドール…ッ!!」

怒りで歯に力が入るエミリイ。

× × ×

エミリイの回想。たくさんのナギポスターが貼られた部屋でナギのプロマイドを掲げながら
歓喜するエミリイ親子。

エミリイママ「わい。ウフフ、ナギナギナギ様〜」

子供エミリイ「ニヤキニヤキニヤキ様〜」

側でナギの写真を見ながら顔を赤らめる子供ベアトリクス。

× × ×

TVでナギ死亡の報道が入りショックを受けるエミリイ親子。ママはショックのあまり寝込んでしまっ。

子供エミリイ「お母様しつかり!」

エミリイママ「フフ…エミリイ。最後に…一度でいいから生ナギ様に会いたか…った…」

子供エミリイ「お母様〜!!」

ガクツとなり目を閉じるエミリイママと号泣する子供エミリイ。側にいる子供ベアトリクスに、

診断結果を伝える医師。

医者「あ…ただの風邪ですから」

子供ベアトリクス、うなずく。

× × ×

回想から戻り決意を改めるエミリイ。

エミリイM「生ナギに会うのは私ですわ!!」

エミリイ「拳を振り上げながら」絶ッ対!! 負けませんよ!! ユエさんーッ」

○ 魔獣の森の前

魔獣の森の前に差し掛かったところで箒を降りるエミリイたち。

ベアトリクス『魔獣の森』ですな

エミリイ「そこを突っ切りますよ!!」

ベアトリクス「ええっ!!」

イメージした近道の地図を背景にして、

エミリイ「近道です!!!」

そう言うや否や心配するベアトリクスを他所に前進するエミリイ。

ヘアトリクス「追いかけて、でも。お嬢様、私達の方では危険では……」
エミリア「魔獣など出会わなければどうしようもないことはありません!!」

× × ×

魔獣の森を迂回していたユエたち。ユエがコレットの前を大きく先行している。

「コレット」ユエ待って。速過ぎるのよ」

ユエ「むっっ。スミマセンです」

速度を緩めるユエ。

「コレット」てゅーか等そんなに得意だっけっ」

ユエ「えっ……いえっそういえば、さきほどから魔力が溢れてくるような高揚感はあるですが……」

「コレット」魔力が溢れてくる……っ」

また速度を上げて

ユエ「そんなことより急ぐですよ。いつ追いつかれるか……」

「コレット」うっ。うんそうだね」

そのとき、コレットのローブの中から何かが光を放ち

「コレット」はれ? 何か光ってる……っ」

内ポケットからうっすらと絵柄ユエの姿が浮かび上がった。パクティオカードを取り出し

「コレット」これは……出会った時にユエがバラまいた小物のひとつ……っ」

驚いてユエに声をかけるコレット。

「コレット」ユエ、ユエ。ちよっぴ見てっ」

そのとき、コレットの進行方向の右手にある森の中から、木が折れる音と女の子(エミリア)

の悲鳴が聞こえる。

「コレット」

と、エミリアとヘアトリクスが森の中から飛び出してきて、

ヘアトリクス「お嬢様しっかり」

ユエ「委員長」

2人の様子にただならぬものを感じるユエ。その刹那、

「コレット」ユエ、ダメッ。右見て右っ」

「コレット」アドバイスを認識する間もなくユエの進路上に樹木の破片を撒き散らしながら

グリフィン・ドラゴンが現れる。

ユエ「!!!」

間一髪、グリフィン・ドラゴンをかわし空中を舞うユエ。その下で、転倒するエミリアと、そ

れを支えるヘアトリクス。少し離れた場所でコレットが状況把握。

「コレット」グリフィン・ドラゴン!?!?!委員長のヤツッ、近道してっつてっつてっつてもないの拾ってまけっ

たのね

エミリアはまだ苦しそうっ

ヘアトリクス「お嬢様」

エミリア「苦しそうにっへ……」

二人が体制を立て直す間もないままグリフィン・ドラゴンが攻撃態勢に入り、

「コレット」カマイタチブレス!! 逃げてえっ、切り刻まれるよっ」

グリフィン・ドラゴンの口から放たれたカマイタチブレスがエミリイとベアトリクスに襲い掛かる。

「エミリイ」?

絶体絶命、涙を浮かべるエミリイだったが、目の前でユエが障壁を展開しエミリイとベアトリクスを防御。かざしている手にはパクティオカードが。

「エミリイ」ユエさん!? 何故私達を…。いえ、なぜあなたが竜種のブレスを防ぐ程の…」

と、ユエの手の内にあるパクティオカードを見て驚愕する。

「エミリイ」!? そ…それは…パクティオカード!!」

その台詞を受けて自身の手にパクティオカードがないことに気づくコレット。

「コレット」あれ? ユエ、いつの間にか…」

その時、サポートに入っていたベアトリクスの限界がきて、

「ベアトリクス」ユエ、ユエさん!! ダメです、楯がもたない」

ベアトリクスの障壁が解けた瞬間、ユエの全身の衣服が破ける。と同時にカマイタチブレスが3人の周りを包む。

「コレット」ユエッ」

カマイタチブレスの中では一層パクティオカードが輝きを放ち絵柄がはっきりと出現。

「エミリイ」しかもそれは…選ばれた者のみ与えられるという、あの…アーティファクトカード!!」

その間、カードを手にして変身シークエンスに入るユエ。

「ユエ」来たれ(アデアット)!!」

その声と共に足元に発生した魔方陣を中心に渦巻く魔力。

変身したユエはパクティオカードの絵柄と同じ姿に。

「エミリイ」パクティオカードとアーティファクト…!! つまり…」

「ベアトリクス」魔法使いの従者(ミニステル・マジ)!!」

「エミリイ」ユエさん…あなたは一体…」

「ユエ」(振り向いて)委員長!! 怪我はないですか!?!」

「エミリイ」(キョトンとした表情で)ハ? ハイッ…」

「ユエ」よかった。それならいけるです」

煙が晴れ、目の前にはグリフィン・ドラゴンの姿が。

「ユエ」倒すですよこの魔獣…いいですねっ」

「エミリイ」な、何を言ってるんですかユエさん。私達がこんなのに勝てる訳がないでしょう!?!」

「ベアトリクス」そうです! たとえ下位種とはいえ、アレはれっきとした竜種です! 私達では…」

「コレット」そそそそ、そうだよユエ! 無理無理っ逃げようよお」

逃げ腰になる3人をよそに、ユエは空間にアーティファクトのウィンドウを展開。一人分析を進めながら、

「ユエ」この時期のグリフィン・ドラゴンは凶暴で一度狙われたが最後、ただの罠では逃げ切れませぬ」

そこで視線を3人に向けて、

ユエの気迫に押されるエミリィ。

エミリィ「むむ…」

× × ×

岩場付近で限界に達するコレットとベアトリクス。二人のニーソックスは膝下まで破け、ベアトリクスに至ってはスカートの前身頃まで破け下着があらわに。

コレット「きゃあああダメダメツ、もうダメ死んじゃうっ」

ユエオフ(念話)「準備OKですー!コレット そのまま光を目標してまっすべー!」

ユエが念話でコレットに指示。

ユエオフ(念話)「私が見えたら散開退避」

コレット(歓喜の表情で)「」

コレット:ベアトリクスの眼前の枝の上に立つユエが、儀式用の短剣を握って光を反射させている。さぶにグリフィン・ドラゴンの気を引くと声を張るユエ。

ユエ「じつちを見るですタカトカゲ、私が相手です!!」

ユエにカマイタチブレスを放つグリフィン・ドラゴン。

ユエ「べ……」

障壁を展開しその場をしのぐユエ。

ユエM「一撃程度なら今の私の障壁で耐えられるのは実証済み……」

タイミングを見計らい、

ユエ「今です!!委員長ー!」

ユエが見上げた上空には魔法を展開させ待機していたエミリィがいて

エミリィ「くっ、素人のくせに私に命令を…。どうなっても知りませんよ!!」

氷槍弾雨(ヤクラーティオー・グランディニス!!)「」

真上から降り注ぐ無数の氷の槍に気づいたグリフィン・ドラゴンが、体勢を上方に向け風の障壁を展開。

グリフィン・ドラゴン「ゲルアッ」

ユエM「ここです!! 委員長が奴の障壁を上方に逸らしている隙に懐入! もっとも」

ロープを脱ぎ捨て、氷の槍の間を縫うようにグリフィン・ドラゴンに接近するユエ。ギリギリのタイミングで回避するため服や髪を氷槍がかすめてゆく。

ユエM「そのためには委員長の氷槍の雨を潜り抜けなければなりません」

氷槍が額をかすめ「うっ」となるユエ。

ユエM「これを抜ければ奴の弱点まで…」

近づきつつ呪文を詠唱し始める。

ユエ「フォア・ソククラティカ・ソククラティカ

闇夜切り裂く(ウーヌス・フルゴル) 一条の光(コンキデンス・ノクテム)

我が手に宿りて(イン・メア・マナー・エンス)敵を喰らえ(イミークム・エダット)「

グリフィン・ドラゴンの角まで接近し

ユエM「わずかに一手です!!」

と、グリフィン・ドラゴンの左角に短剣を突き刺す。

グリフィン・ドラゴン」キヤッ

即座に反応しユエを翼で払うグリフィン・ドラゴン。

グリフィン・ドラゴン」グレア

ユエ「苦悶の表情でー！」

その刹那、途切れそうになる意識を繋ぎとめながらもユエが魔法を発動。

ユエ「白き雷(フルグラティオー・アルビカンス)!!」

短剣めがけ魔法の杖からほとぼしる雷光。直撃しグリフィン・ドラゴンの角が激しい音をたてて折れ飛ぶ。

グリフィン・ドラゴン」クルオオ……ン」

悲鳴を上げながら倒れるグリフィン・ドラゴン。地響きが鳴り響く。

コレット「や、やったぁ」

グリフィン・ドラゴンを背にして無事を確認するユエ、コレット、ヘアトリクス。コレットはユエに肩を貸している。エミリイはその様子に驚嘆の表情を浮かべる。

エミリイ「ほ、本当に倒してしまっなんて……。あんな儀式用短剣では一センチでもずれていたら竜の角など折れなかったはず。私の氷の槍の雨も降らず場所、順番を打ち合わせておいたとはいえ、あの箒捌きがなければとても……」

傍らにある(地面に刺さっている)折れたグリフィン・ドラゴンの角を見ながら、

エミリイ「M」一か月前まで素人だったとは思えない……。一体どれほどの努力をしたというのです」

○魔法学園・試験、コール付近

満身創痍のユエ、コレット、エミリイ、ヘアトリクスがそろって箒で飛んでいる。ユエは額に絆創膏を貼っている。

コレット「でもコリとコリ2位があっカッ」悪っ」

エミリイ「過ぎたことをいつまでも。みっともないですよ」コレットさん

コレット「そもその理由は、委員長が無理に近道したせいだけだね」

エミリイ「へ……」

コレット「それにオステアに行けばユエの記憶も戻るかもしれないのにね」

ユエ「まあ……次の機会を待つですよ」

エミリイ「(思想)思いつくところがあるよっかな表情で(……」

x
x
x

コール地点の手前で異変に気づく4人。学園で待つ生徒たちが歓声を上げている。

コレット「はれ??」コリのお出迎えにはいきやかな」

○魔法学園・コール地点

箒を降りると歓声は益々大きくなり、

コレット「へ、何々??」何々??」

歓声で湧く生徒達の中から生徒AとBが前に出てきて、

生徒B「すいよいよあんた達ー！」

生徒A「学生があんなのを倒したなんて聞いたことありませんわ」
「レット」(ハットとして)「あ、そっか。竜を倒したから……?」

その「>>>」から「>>>」もなく声が聞「え、

総長の声」そのとおりよ。この選抜試験は有能な候補生を選ぶためのもの。お祭り中のオスティア

はかかなり物騒になるから即戦力が欲しいのよ」

ハイヒールをならしながら近づくと総長。

総長「森の竜種を倒せる実力があるなら、その資格は充分だわ」

「レット」総長(グランドマスター)「!」

総長「竜を倒した者には特別枠を与え合格としましょう」

「レット」(「ドキッとして」)「ええーっ!」

期待する「レット」だったが生徒達はエミリイを祝福。

生徒A「やったねエミリイ!」

生徒B「さすが委員長!」

エミリイ「えっ!えっ!」

その側では「レット」が涙目で血管を浮き立たせ、納得がいかないという表情で

「レット」「ちよちよ、どーゆー!」ト「ト」ン「レット」! 竜を倒したのは主「」の「エ」…」

「エ」「まあ、落ちこぼれの私達がやったと言っても簡単には信じてもらえないかと…」

「レット」倒した瞬間の映像はないの!」

二人を置き去りにしてどんどん話が進み、

実況アナウンス「それではなんだかんだで逆転勝利したフォン・カツェとデュ・シヤ」ン」ト」

カツェ「なんだかんだ言っ」ナ」

デュ・シヤ「勝つてはい」のです」

実況アナウンス「特別枠のエミリイ・セブンスに騎士団員と共にオスティア警備兵に就く榮譽

を……」

エミリイ「お待ちなさい!!」

アナウンスを遮ってエミリイが進言。さわつく生徒達。

エミリイ「皆さん勘違いしているようですわ。クリフィン・ドラゴンを倒したのは私ではありません」

その言いつつ「エ」に歩み寄り肩に手を置き、

エミリイ「の……エさんです!」

「エ」(意外そうな表情で)委員長…」

エミリイ「フン」…」

エミリイは総長に視線を向け、

エミリイ「そっとう訳ですから総長、特別枠は「」の「エさん」…」

総長「あらエミリイ、あなたこそ勘違いしているようわ」

エミリイ「えっ」

総長「特別枠は竜を倒した貴方達4名よ。優秀な候補生は何人いても困りませんからね」

ウィンクで答える総長の発言「、一同一瞬間まり、

「エ」「え…」

「ロベック」や…」

「ゴール地点全景で

「コレット」やったぁー」 やったよ「ユエー」

「この日最大の歓声上がる。」

○アリアドネー・空港遠景(夕方)

「4日後」

「エミリア」ではー」

女教師や生徒たちに見送られる候補生達(ユエ、コレット、エミリア、ベアトリクス、カツツエ、

デュンヤ)

「ユエ」行って参ります!!」

「念願かなって身悶えるコレット。」

「コレット」ああーっっん、ついに生ナギに会える」

「エミリア」あなたが会えるとは限りませんよ。会うのは私!!」

二人が背後で言い合うのをよそにユエの様子を機にかけるベアトリクス。

「ベアトリクス」ユエさん、どうかされましたか?」

「ユエ」いえ……」

「パクティオーカードに見入るユエ。」

「ユエM」パクティオーカードの裏に刻まれた文字…ネギ・スプリングフィールドの従者…

「ナギではなくネギ」

「パクティオーカードの上辺につけられた白き翼に目を移し。」

「ユエM」それに…白き翼(アラアルバ)」と刻まれたバッジ…いずれにせよ答えは、この空の向こうに

「…」

「ユエ、決意の表情で

「ユエM」いざオスティアへ…」

※実際のアニメに収録されている音声は
シナリオと異なる場合がございます。